

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<書評と紹介> 山本光正著 『江戸見物と東京観光』

著者	新藤 透
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	67
ページ	46-49
発行年	2007-03-24
URL	http://hdl.handle.net/10114/10860

〔書評と紹介〕

山本光正著

『江戸見物と東京観光』

新藤 透

江戸に関する学術的な研究は従来様々な視点から検討をされてきた。特に近年では、都市機能、観光地、景観・環境などの新しい視点からの研究が発表されてきており活況を呈している。本書もそのような潮流の中に位置づけられるものと思われるが、出色な点は江戸後期から明治・大正期までの江戸・東京を通して扱っていることである。昨今は、学問の細分化に伴い——日本史学に限ったわけではないが——限定された範囲のみ取り扱う、所謂蜻蛉型研究になりがちである。そのような中、山本氏が比較的長いスパンで「観光」という視点で検討されていることは、先駆的、並びに基礎的研究として意義あるものである。

それでは著者について紹介をしたい。山本光正氏は一九四四年東京に生まれ、一九六九年に法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻修士課程を修了。現在は国立歴史民俗博物館、並びに総合研究大学院大学助教授の職に就かれている。専攻は日本近世史である。

次に本書の目次を示したい。
はじめに

第一部 江戸見物

第一章 江戸の名所と行楽

一、江戸名所の成立

二、江戸の名所・行楽地

三、旅人のための江戸案内

第二章 旅日記に見る江戸見物

一、江戸時代の旅

二、旅日記

三、旅日記に見る江戸見物

四、まとめ

第二部 観光地としての東京

第三章 案内書の刊行と東京観光

一、江戸から東京へ

二、大区小区制の廃止まで

三、郡区町村制と東京案内

四、博覧会と東京観光

第四章 滞在型の東京観光

一、渋川玄耳著『東京見物』

二、滞在型東京観光の背景

第五章 東京市民の行楽

一、東京人のための東京案内書

二、田山花袋と東京近郊

第六章 それからの東京

一、変貌を続ける東京

二、戦後の東京

あとかき

第一部の「江戸見物」では、明和八年（一七七二）から嘉永元年（一八四八）までに記された十二種の旅日記を使い「江戸見物」の様子を紹介し、検討を加えられている。

これらの旅日記は、東北、北関東に居住する人物の手になるものである。この地域の人々は在所を出発するとまず江戸を目指すことが多いが、その途次、日光や鹿島神宮、あるいは成田山新勝寺などを巡って江戸に入るというケースが多かった。そして江戸を発つと久能山、名古屋を見て回り、伊勢神宮に参拝。帰途は京・大坂から中山道を通り、善光寺などを巡り在所に戻る、というのが一般的だったようだ。当時の旅は目的地を一箇所に絞り、それを目指すという単純な方式ではなく、数ヶ所を遊覧してめぐり歩くスタイルだったのである。

伊勢参拝の途次に江戸に立ち寄ったとはいえ、旅人たちは数週間江戸に長期滞在をして見物しており、殆どが案内人を雇っている。有名社寺や江戸の著名な行楽地などを旅人達は訪れており、一通りの観光コースを案内していたことが読み取れる。見物の対象となったのは有名社寺が中心であるが、例えば浅草寺での記述では、寺社のことよりも仲見世の様子や見せ物小屋などの描写が詳細である。また、吉原にも多くの旅人が足を運んでいる。このように寺社参詣とはいえ、宗教心から起こるものではなく、その周辺に存在していた歓楽街に行くことを目的としていたのである。また旅人達は、繁華街だけではなく、江戸城や大名小路と呼

ばれる大名屋敷も見学している。大名の江戸城登城の様子も早朝にもかかわらず出かけて行き、「幕府権力の威厳と美々しさを目のあたりにするわけである」（二〇九～二一〇頁）。

第二部では明治以降の「東京観光」について検討され、明治期に出版された東京の観光案内書を取りあげている。これら観光案内書は第一部で扱った個人の旅日記と異なり、公刊されたものである。山本氏は公刊された案内書を用いた点について、「その大きな理由の一つは史料所蔵者が江戸時代の古文書は公開してくれても、明治以降特に私的なものとなると公開に消極的になるためである」（二一七～二一八頁）と断っている。

観光案内書は、純粹に観光のために著されたものもあるが、明治期に薩長土肥出身者が東京に大挙して移住してきたこともあり、そのような新規移住者向けの案内書も出版された。また、明治二年（一八八九）の東海道線全通、翌三年（一八九〇）の第三回内国勧業博覧会開催が契機となり、江戸期のように見物者は東北、北関東出身者で占められていた状態は解消され、全国各地から観光客が訪れるようになった。特に東海道線の全通は近畿地方からの観光客が飛躍的に増加することになった。

明治三〇年代にはいると、これら観光案内書に一つの変化が見られるようになってくる。今までのものは、地方からの上京者向けのものではあったが、東京在住者向けの案内書も出版されるようになってくる。その理由の一つとして主に地方出身者が旧来の江戸的なものを基盤とした遊びの場・行楽地とは異なったものを強く求めたからだと言本氏は述べられている。

江戸から東京へと移り変わり、行楽地も変化した。江戸期は上野から隅田川、江戸湾に向かう地域に存在していたが、明治以降は薩長土肥らの地方出身者が流入してくるに従い、東京の西部地域が開拓されてくる。関東大震災以後は中央線沿線へと拡大し、戦後はお台場などの湾岸地域へと、行楽地は拡大の一途を辿っている。このように東京は常に変貌し、膨張し続け、新しい行楽地が生まれ続けている。東京は「いつも」新しく、面白くなければならないし、観光に来る人々はそれを求めているのである。山本氏は最後にこれら地方からの観光客は「東京に最先端の夢を見に来るのであるか」(二一九頁)と結んでいる。

山本氏は「叩き台」(二二〇頁)と本書の執筆意図を最後に記されている。「江戸見物」・「東京観光」を一冊の書物で通観することにより、これからの個別具体的な研究へと繋がっていくものと思われる。戦後の日本近世史研究は、史料が豊富に存在するという「現状」が逆に短所となり、詳細な個別実証研究は発展したが、それらを纏める総合的な視点が欠如していたと筆者は捉えている。その点山本氏が、日本史学からのアプローチによる「観光史」研究において、このような性格の研究を公刊するということは大変影響が強いと推察される。

「観光」というテーマは日本近世史のテーマとして脚光を浴びているのは近年のことであるが、そもそも観光を専門に研究する観光学は、ローマ大学教授マリOTTIが一九二七―二八年にかけて『観光経済学』を著したのに始まる。わが国の本格的な研究は、一九五〇年に出版された田中喜一の『観光事業論』である。この

ように、観光学の研究は、五〇年の蓄積がある。

本書において山本氏は、近世を「江戸見物」、近代を「東京観光」と言葉に分けて使用されているが、区分の仕方について特に根拠を示されていない。観光の語源は中国の周の時代に著された『周易』に求められる。わが国では一九二〇年ころから一般的に使用され始めてきたが、当初は国際観光を指す用語であり、国内観光は「漫遊」、「遊覧」と呼ばれていた。そもそも観光という言葉には国の光を他国に知らしめる意味があったからである。

観光学によると、観光の形態は①周遊型、②目的型、③滞在型に分類される。①は移動型の観光で「見る」ことを目的としている。②はレジャー型の観光で、スポーツ・レクリエーションなどを「行う」ことを目的としている。③は保養型の観光で、リゾート地に「いる」ことを主目的としている。本書第二章第四章で山本氏は「滞在型」の東京観光を紹介しておられるが、紹介されている事例は一週間程度東京に滞在して、その間名所を観光する、というもののばかりであるので、上記カテゴリーによると③の滞在型観光の事例ではなく、①の周遊型観光の区分に入るとの思われる。また、観光学にも歴史的な研究を行う「観光史」の分野が存在しているが、本書では特になくはない。また、日本史学としては、これら観光学の研究も積極的に摂取し、また観光学の研究者とも交流を行う必要がある。歴史学者今井登志喜は「歴史学の如き広汎な範囲に關係する性質の學問にあつては、一切の科學からなんらかの寄与を期待し得る可能性をもつといえるのである」(『歴史學研究法』東京大学出版会 一九五三年

四月 一二頁)と喝破しているが、正に歴史学の本質を鋭く突いた指摘である。

日本近世史として「観光」が新しいテーマである今日、基礎的な問題として用語の意味、あるいは使用法の叩き台を打ち出しておくことが求められているだろう。その際直接的な先行研究とはならないかもしれないが、観光学の蓄積を有効に利用することも現時点では必要な作業かと思われる。

〔二〇〇五年二月刊 二二〇頁 二、三〇〇円＋税 臨川書店〕